

Memo

おわりに

本校では、頻繁に研究会が行われています。先生方は、みな熱心に討論し、研究は日々深まっています。しかし、ややもすると討論の視点がぼやけて何を話し合ったらいいのかよく分からない状況も生まれてくることもあります。そんな時には、「学力」をどのように捉えるかということを考えてもらうようにしています。

「学力」の考え方は、時代とともに変化しています。過去には、小学校では基本的な「知識」「技能」を身につけておきさえすれば、社会に出てそれを活用する場面になれば基本的な「知識」「技能」を生かして課題を達成できるであろうという考え方でした。しかし、単に「知識」「技能」身に付けるだけでは、なかなか活用出来ないということで、活用する力がもとめられるようになってきました。すなわち「思考力」「判断力」「表現力」です。

そしてこれからは、それを超えて主体的かつ協働的に課題を解決していく力が求められるようになってきています。そのためには学習方法自体が主体的かつ協働的なものでなければならぬのです。

さて、そんなことで本校の研究を見つめ直してみると、研究主題「考える子を育む」研究副題「学ぶ楽しさを味わう授業」はどうでしょうか。

「考える子を育む」ことで「考える」という側面を全て洗い出しました。例えば「根拠を明確にすること」「これまでの経験をもとに予想すること」「表現をよりよく変えていくこと」そのことにより、具体的に子どもに授業で何を求めていけばよいのかより明らかになりました。「考える子」であれば、仲間と協働しながら問題を解決していく可能性が広がるのです。

「学ぶ楽しさを味わう授業」の楽しさはどこから生まれるのかそれは、本研究では、以下の3つであると捉えています。

- ① 本質に気づいていく中で得られる楽しさ
- ② 相互の考えの深まりやよさを認め合う中で得られる楽しさ
- ③ 自分の成長を認識していく中で得られる楽しさ

このような楽しさを得るためには、主体的に学ぶことが大切です。しかも相互の考えの深まりやよさを認め合うという協働的な学びも欠かせないものです。

そのように考えると本校の研究の方向性は、子ども達をしっかりと伸ばし、求めているような学力が得られるのではないかと考えています。

まだまだ未熟な点も多い本研究ですが、授業のあり方、子どもの学ぶ姿、教師の指導の仕方等ご覧頂いた皆様からの忌憚のないご意見、ご指導を頂ければ幸いです。今後ともよろしくお願い致します。

金沢大学人間社会学域学校教育学類附属小学校
副校長 的場 茂樹

研究紀要 第69集

平成27年10月 印刷発行

編集代表 吉川一義
発行所 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属小学校
印刷所 株式会社 谷印刷

©2015 金沢大学人間社会学域学校教育学類附属小学校
無断転載・複製を禁じます。